

私が大学の合唱団を卒団して豊混に入団したのが1979年である。今回は豊混草創期の1941年から1955年間の歴史を書いてみようと思うが、もちろん私が入団以前のことである。従って、その内容については、2002年11月に発刊された「豊中混声合唱団60年史～うたいつぐ心からのうた～」を参考文献とし、それらに諸先輩から聞いた話を挿入したものである。

豊中混声合唱団ルーツを遡ると、1941年（昭和16年）、当時の大阪府立豊中高等女学校（現・大阪府立桜塚高等学校）の音楽科の教諭であった榎本正さん（1913～1989）の一念発起に辿り着く。

榎本さんは、上野音楽学校（現、東京芸大）声楽科を卒業後、豊中高女の前身である大阪府立第14高等女学校に奉職されたが、上野音楽学校の卒業生で構成されていた「同声会大阪支部」の後援を得て、「豊中の地に混声合唱団を設立しよう」と声を上げられたのである。

その際、豊中を拠点に多彩な音楽活動を展開されていた井伊弘さん（1919～2002、大阪音大卒、豊混第二代指揮者）と協力し、同声会のみならず、関西学院大学や大阪薬科専門学校、豊中高女、梅花学園などにも声をかけてメンバーを募り、1941年（昭和16年）の秋に豊中混声合唱団は産声をあげた。

練習場は、豊中市立大池国民学校（豊中駅前にある現・大池小学校）と定められた。

なお、設立当初は同声会のメンバーでもある榎木さんが指揮をされたが、すぐに井伊さんにバトンタッチされている。

ちなみに1941年というのはどんな時であったかと言うと・・・

- ・1939年：ドイツがポーランドに侵攻し、イギリスとフランスがドイツに宣戦布告、
- ・1940年：イタリアがイギリスとアメリカに宣戦布告、そして日独伊三国同盟が締結される
- ・1941年7月：日本軍はフランス領インドシナ南部進駐、10月：東條英機内閣成立、  
12月1日：御前会議にて開戦決定、12月8日：マレー半島に上陸開始、  
12月18日：真珠湾攻撃により太平洋戦争の火蓋が切られる

というように、「第二次世界大戦」の激震の年であった。

また、1937年の盧溝橋事件を機に勃発した「日中戦争」は既に4年を経過しており、国民の生活も次第に戦争の色が濃くなってきており、例えば

- ・4月1日：6大都市で米穀配給通帳制・外食券制実施、  
文部省は音階教育を「ドレミファ」から「ハニホヘトイロハ」に改定
- ・5月8日：初の肉なし日実施（毎月2回、肉屋・食堂などで肉を不売とする）
- ・10月16日：大学・高等専門学校などの修業年限短縮を決定
- ・11月15日：兵役法施行令改正公布（丙種も召集）

等のように、1941年には戦時体制へと大きく変化していった。

そんな時にである。「豊中に混声合唱団を創ろう」などという動きが起ったのである。

ここからは想像の域を出ないが、榎木さんや井伊さんは、不気味に忍び寄る戦争の暗雲を感じ、絶望の対極として、音楽ができる平和な世界への希求の灯火を心の奥に点けようとされたのではないだろうか。そして、こんな時だからこそ混声合唱団を創ろう、と行動を起こされたのではないだろうか？

設立当初は、小学唱歌集、ドイツ・イギリスの民謡集、「海行かば」などの戦意高揚の歌に加え、信時潔のオラトリオ「海道東征」などにも取り組み、活発に活動されていたようであるが、やがて戦況の悪化と共に、指揮の井伊さんをはじめ、男声が次々に招集され、混声合唱が成り立たなくなった。

それでも残った団員は灯火管制の中でも歌声を絶やさなかったそうである。

数年前にお亡くなりになったが、豊混には黒川園子さんという設立当初のメンバーが長く歌っておら

れた。2008年の豊混第48回定演では、寺嶋陸也さんに委嘱した「沖縄のスケッチ」の大人と子どもバージョンで、沖縄の巫女の役をされたことを覚えておられる方もあるかもしれない。

<https://www.youtube.com/watch?v=0oAkcTzqao0>

9分33秒あたりからの「だんじゅかりゆし」、19分42秒あたりからの「赤田首里殿内」でそのお姿を見ることができる

黒川さんは戦時中の豊混の練習場の鍵番だったそうで、練習日には会場の鍵を開け、そして練習時間ずっと誰かがやってくるのを待っておられ、結局、誰も来られず、終了時間に鍵を閉めて帰る、という生活を続けておられたそうである。もし黒川さんがおられなかったら、豊混は消滅していたかも知れない、という話を私は先輩方から聞いたことがある。

さて、1945年8月15日に終戦となり、男達が戦場からポツポツと帰還してきた。10月には井伊さんも無事復員され、早速ご自宅にて合唱活動を再開された。

関西の合唱界全体を見ても、その復興は早く、なんと翌1946年4月には関西合唱連盟が設立され、豊混も加盟、創立記念合唱大会では井伊さんの指揮で歌っている。その時に歌った歌は「郷愁（大中寅二）」、「流浪の民（シューマン）」、「子等を思ふ歌（信時潔）」、「合唱讃歌（平井康三郎）」であった。

また11月には第1回関西合唱コンクールが開催され、豊混第三代指揮者の岩尾良治さん（大阪音大卒、声楽家、井伊さんと同期）の指揮で出場し、混声の部9団体中、豊混は3位を獲得している。その時に歌った歌は「花（滝廉太郎）」であった。また、当時の写真で見ると、ソプラノが15名、アルトが13名、男声が12名、計40名が歌っている。



1946年11月3日

第1回関西合唱コンクールで歌う豊中混声  
指揮：岩尾良治

このように、井伊さんを軸として豊混の戦後はスタートしたが、その運営基盤としては脆弱であったため、一時は継続が危ぶまれる事態となってしまった。折しも、豊中市は全国に先駆け、公民館活動による社会教育活動を推進しようとしており、合唱を通しての文化事業を「音楽教室・合唱講座」という形で推進するために井伊さんに白羽の矢を立てた。その結果、1951年には豊混の活動を公民館の合唱講座に移行し、井伊さんの音楽的指導のもと、公民館がさまざまな運営実務を担う形となった。練習場は、井伊さんが教諭を務めていた大池小学校の音楽室が提供された。これにより、豊混の運営危機はひとまず救われることになった。

その後、「合唱講座」は安定して成果をあげていったが、やがて、公民館は他の多くの教室の運営を行うには「合唱講座」を担い続けるのが重荷となり、一方で合唱講座側からも自立の機運が出てきたため、1953年2月、公民館から独立し、黒川さんの言葉を借りると『豊中混声合唱団として再発足』した。

このように戦後の豊混の復興は、井伊さんの存在が大きいが、同様に公民館の存在が果たした役割もまた大きかったのであり、それは今日の公民館活動につながっている。

1955年には大池小学校の児童数増加により、練習場を岡町駅前にある克明小学校へ移している。

ちなみに、同年2月10日、西岡茂樹は兵庫県八鹿市で生まれた。両親は八鹿高校の教諭で、職場結婚であった。そのご縁もあり、今でも、私は八鹿高校合唱部と親しくお付き合いさせていただいている。

1955年12月には、井伊さんが多忙のため指揮者を辞任、第4代指揮者として松浦周吉さん（1930～2019、関学グリー出身、大和銀行合唱団の育ての親）が就任されている。 ～次回に続く～